

# NHK大河ドラマ「八重の桜」の 特別展 企画委員として

こ えだ ひろ かず  
小枝 弘和 (同志社社史資料センター社史資料調査員)

## 報道発表

2011年3月11日、東日本を大地震が襲った。多くの方々があの日のことをしかと記憶されていることであろう。それから3カ月後の6月22日、2013年のNHK大河ドラマは「八重の桜」に決まったとの報道があった。復興に向かう福島・東日本へエールを送ることが、ドラマ制作・放映の趣旨であった。この時、新島八重は震災復興のシンボルの一つとなった。

この報道から数日後に、早くも大河ドラマ特別展を展開するNHKプロモーションからアプローチがあり、9月28日には正式に特別展への協力依頼願が提出された。同志社大学は、ドラマを制作・放映するNHKの趣旨に賛同し、NHK大河ドラマ特別展「八重の桜」への全面的な協力を約束し、依頼を承諾する。ここから同志社社史資料センターと大河ドラマ特別展との関係が構築されていった。一方で、この年の12月、福島県からも八重に関する企画展への協力のオファーがあり、センターではドラマの趣旨に賛同

して協力するという考え方のもと、NHKならびに福島県には最優先で資料貸出などで協力する方針を取るに至った。

## 最大の壁

NHK大河ドラマ特別展は、企画・運営など全般について、会場となる博物館の学芸員らを中心に招集して企画委員を組織し、特別展の内容が構成されていく。会場となった東京都江戸東京博物館、福島県立博物館、京都文化博物館から学芸員が各1名ないし2名、そして同志社社史資料センターから1名、さらにNHKプロモーションから事務方で2〜3名が参加して、委員会が組織された。第1回目の会議からまず委員の頭を最も悩ませたことは、新島八重の知名度、そして、八重に関連する資料の些少さであった。従来大河ドラマでは、日本史で名の知れた人物が取り上げられることが多く、したがって、現存する関連作品も国宝、重要文化財などを含む資料群が存在する。しかし、八重については、当時は同志社が所蔵している資料以外に所在が知られた資料は決して多くはなかった。さらに、

八重の会津時代の資料が余りにも些少であった。つまり、八重関連資料を軸として特別展を構成すること自体が難しいという有様であった。この実情をふまえて、展示の内容構成を考えていくことになる。

### 特別展に込めたメッセージ

展示の内容構成は七つのパートに分けられた。プロlogue、第1章「会津の教え」、第2章「幕末の京都」、第3章「会津籠城」、第4章「古都復興―覚馬と襄―」、

第5章「ハンサムウーマンへ」、エピilogueである。なかでも、とりわけプロlogueとエピilogueに最大の注意と最高の表現が求められた。大河ドラマ「八重の桜」の使命は先述のように震災復興から立ち上がる福島・東北へエールを送ることである。つまり、特別展もまた、単なる八重ゆかりの作品を展覧する場ではなく、大河ドラマ制作の趣旨に則り、メッセージ性を込めた場とすることが必須であった。その際の最大の関心が導入部分



着物姿の八重

と結論部分になるわけである。会議の結果、プロlogueとエピilogueで各々一作品を選出し、そこに企画委員としてのメッセージを込めた。選出された資料はいずれも八重旧蔵の写真である。故郷・会津への想い

まず、プロlogueで選ばれた写真は八重旧蔵の若松城（鶴ヶ城）天守を東側から撮影した写真であった。そこには1868年（慶応4）8月23日から1ヶ月にわたり籠城戦の舞台となった若松城の姿がある。城壁は崩れ、鷲尾も吹き飛び、城壁は内部の構造が露出するほどのダメージを受け、今にも崩れんばかりの姿を呈している。1874年（明治7）に若松城は取り壊されるが、写真に納まることで、籠城戦の凄惨な戦いを考えさせる姿を後世に残した。そして、八重はこの写真をおそらく明治中期以降に会津で購入し、それより京都の自宅で大切に保管していたのであろう。その気持ちは察するに余りあるのではないだろうか。大切な家族、愛すべき故郷のシンボルであった若松城、全てを失った敗北の象徴であ



若松城天守

る若松城、そして、それらを喪失してもなお心のよりどころであった若松城に対する八重の敬意と追慕と矜持をこの一枚の写真は今日に示している。八重という人物の心を端的に示す資料である。

次に、エピilogueで選ばれた写真は、

一枚の集合写真であった。この時八重は83歳で、撮影された場所は金戒光明寺内の会津墓地にある、鳥羽伏見の戦いで命を落とした会津藩士への慰霊碑の前である。1928年（昭和3）11月17日、京都都会津会秋季大会記念に撮影された写真であった。奇しくも、この年は戊辰戦争から60年、さらに、9月には第9代会津藩主松平容保の孫・勢津子と昭和天皇実弟の秩父宮雍仁親王の婚儀が執り行われた。60年という長い月日を経て、ようやく朝敵の屈辱が晴れた。その晴れ晴れしい心情を実によく表した集合写真である。写真に納まる人はいずれも会津にゆかりのある人物で、当時の当主松平保男、勢津子の父・松平恒雄、山川健次郎など京都以外に住む会津出身者も並んだ。八重も最前列に列し、晴れやかな顔をしている。そして、この写真の裏面に八重は1首の和歌を認めた。

「千代ふとも いろもかわらぬ 若松の 木のしたかけに 遊ぶむれつる」  
郷土愛や矜持のもとに集った人々の心情を代表する和歌であった。

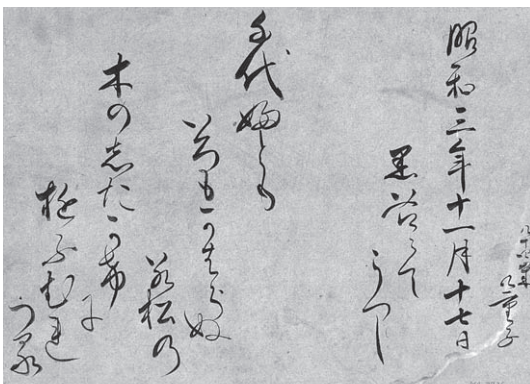
### キーワードは会津

この2作品は企画委員全員の、特別展「八重の桜」に込めたメッセージの具現であった。特に集合写真は全てを失った会津藩の人々がその生涯を賭して懸命に生きた証である。これらの写真に震災復興と原発事故への対応という大きな課題に直面する人々へ何かしらのメッセージを送ることができればとの想いが込められた。

そして、当然ながら2作品に共通するキーワードは会津である。そして、会津こそ八重の生涯を貫く最重要キーワードである。先述のように、八重が残した資料は決して数が少ないわけではないが、八重が20代前半までを過ごした会津時代の資料は、懐剣を除き、所在が明らかでない資料はなかった。しかし、50代半ばを過ぎたところから、会津時代を語りだした八重の語りには、会津という土地、風土、文化、教育、政治、経済がいかに八重の思想形成に影響を与えていたかを感じさせるものばかりである。また、これまで会津の歴史が、会津の側から描かれるこ



京都会津会秋季例会集合写真表面



京都会津会秋季例会集合写真裏面

とは決して多くはなかったため、一般的に会津の歴史が認識されていたとはいえない状況であった。そこで、八重の語りをヒントにしながら、会津という一つの文化と歴史を様々な作品を通じて紐解き、父や兄の強い影響のもとでたくましく育った八重を取り巻いた環境、影響を受けた思想、慣れ親しんだ心の風景を具体的に描くことがまず必要であった。そして、国のあり方を大きく変えた戊辰戦争が八

重に与えた、あるいは八重から奪ったものに、八重が感じた喪失感に迫ることこそ、その後の八重の生き方を理解するうえで最重要である。また、八重は兄・寛馬を頼ってきた京都では裏と出会い、幸せでありながらも明治初期はクリスチャンであるがゆえにマイノリティであった。しかし、裏とともに生きる中で、八重はその存在価値を自らに付し、裏の永眠後には、八重はその社会的地位を以って篤志看護婦や茶道に従事するようになる。とりわけ、勲六等宝冠章に代表されるように、後半生の八重の活動は国内で高く評価された。しかし、それは八重が社会的地位の向上を目指したからではなく、国家、もしくは地域社会における自らの立ち位置とその価値を認識した上での行動であった。このような八重の生き方を規定したものこそ会津である。先述のエピソードで選出した写真と和歌が全てを物語る。このような八重の生涯について、委員会では210タイトルの資料を選出し、借用・出陳することが決定した。ちなみに同志社からの貸出資料点数は100点である。



勲六等宝冠章

### ドラマと特別展の整合性

企画委員の会議は月1回程度、約1年にわたって続いた。各会場が担当する事業運営以外の、特別展の内容に関する議論が主である。内容を章に分け、各章ごとに作品の候補リストを作成し、さらにふるいに掛けて出陳する作品を選定していく。そして、出陳作品が決定次第、図録の素案に関する長時間の議論を経て、作品解説の原稿作成と読み合わせ、章解説、人物紹介、年表作成、総論および各論担当者決定と執筆、参考文献および引用文献の整理、その他のコンテンツの作成などを行う。細かい作業をあげるときりが無い。これら以外にも小学生向けが

イトブックの作成、会場で放映する映像資料の監修等、担当作品の積文と現代語訳の作成などもあり、より細やかにわかりやすく来場者に伝えるために、委員一同があらゆる仕事を担当した。しかし、共通して大きな疑問があった。

特別展に取り組む最初の段階から、先行研究や以前に開催された展覧会図録などを参考にしてストーリーを構成するが、肝心のドラマの内容に関する一切の情報が入らなかった。企画委員が組織される最初の会議に若干の情報提供があったものの、ドラマの内容はおろか登場人物に関する情報も一切存在しなかった。もし「八重の桜」がこれまで放送されてきた大河ドラマのように原作本が存在するのであれば、その登場人物を容易に想定できたが、「八重の桜」は原作のない、書下ろしである。よって登場人物の想定は不可能であるという前提で、特別展は歴史的事実に基づいたストーリーで大河ドラマの趣旨に沿うように出陳作品を構成することになった。結果としてドラマを構成する重要人物を欠くことはなかったが、例えば山川健次郎、大山捨松など、

### 開幕

これまで述べてきたような経緯を経て、特別展は最初の会場である東京都江戸東京博物館で開幕を迎えた。2013年3月11日、ちょうど震災から丸2年となる日であった。前日の10日にはマスコミ向けの内覧会を開き、多数のマスコミが取材に訪れたが、3月11日の朝刊で記事にされることはなかった。11日の各紙の朝刊は2年前の東日本大震災の特集が組まれ、終わりの見えない復興への道のりが特集されていた。復興の難しさ、事業の意義を改めて認識し、肅々と事業遂行すべきと気持ちを新たにしたり日であった。東京都江戸東京博物館での開幕を皮切りに、福島県立博物館、京都文化博物館と各会場およそ50日間、計150日ほどで約15万人の来場者があった。会期中、

各館では講演会・シンポジウムを中心に様々なイベントが実施され、例えば福島県立博物館では、まずは八重という人物を知ってもらうための講演会が数度にわたって開催された。八重が無名であったための方策ではあるが、こうした機会は福島県内の八重に対する認識向上に効果的であったと考えられる。また京都文化博物館ではプレ・イベントで八重ゆかりの地を歩くツアーが開催され、炎天下にもかかわらず多数の人々が参加し、京都御所から若王子山頂の同志社墓地まで踏破した。八重に対する各地の関心は高いものがあつた。

## 同志社と福島

特別展「八重の桜」では全国3カ所で15万人を動員する展覧会となったが、ポスト大河ドラマ「八重の桜」となった今、これから被災地、特に福島とのかかわりをどのように構築、発展させていくか、積極的な方策を考える必要がある。同志社は特別展では数多くの資料を貸し出し、全国3会場の力もあつて、八重という人物を通じて同志社の名前は全国に広く知

られるようになった。しかし、福島県をはじめとする被災地はもちろんのこと、特に福島県には原発事故の問題が残る。今だ眼前の直面する問題に対処し苦悩する人々が多数存在することは事実である。この現状にどのようにかわるかを、考えるべきではないだろうか。

昨年、学校法人同志社は福島県と包括協定を結び、同志社大学は会津若松市と包括協定を結んだ。この協定は、言うまでもなく大河ドラマに伴う一過性の協定

であるべきではなく、創立者の一人である山本覚馬、そして、覚馬の妹であり妻である八重の故郷・会津と福島県との永続的な関係の端緒である。「八重の桜」は一つのきっかけに過ぎず、大河ドラマと特別展がNHKと被災地との関係を具体化したように、同志社もまた何らかの方策を以つて福島県ならびに会津若松市との関係を発展させていく方策を考える必要がある。



結婚当時の新島襄と八重